

令和２年度 第２回宇治市小中一貫教育推進協議会会議録

会議名	令和２年度 第２回宇治市小中一貫教育推進協議会
日時	令和３年３月１１日（木） １８時００分～２０時００分
場所	宇治市役所 ６階 ６０２会議室
出席者	（委員） 榑原会長 荻副会長 瀧尻委員 朝倉委員 内田委員 井戸本委員 海老瀬委員 丸尾委員 （報告者） 広野中ブロックラーニングコーディネーター清水教諭 黄檗中ブロックラーニングコーディネーター江上教諭 榑島中ブロックラーニングコーディネーター関教諭 （事務局） 岸本教育長 伊賀教育部長 上道教育部副部長 林口教育支援センター長 栗田教育総務課長 三村学校管理課長 福山教育支援課長 山口教育総務課学校規模適正化推進室長 齊藤生涯学習課長 吉田学校教育課長 石田学校教育課副課長 藤田学校教育課総括指導主事 石田学校教育指導主事
配付資料	資料１ ○令和２年度宇治市小中一貫教育中学校ブロック活動状況 ○令和２年度中学校ブロック年度総括票 ○令和２年度宇治市小中一貫教育推進協議会の活動報告 資料２ ○西小倉中学校ブロック 資料 （西小倉中学校ブロック小中一貫教育ニュース） ○榑島中学校ブロック 資料 （榑島中学校ブロック小中一貫教育だより「MAXIMUM」他） ○広野中学校ブロック 資料 （広野中学校区宇治ひろの学園の取組「HOOP」他） ○黄檗中学校ブロック 資料 （「小中一貫教育の推進について」 他）
１ 開会 ・ 岸本教育長 開会挨拶 ２ 報告及び協議事項 「令和２年度宇治市小中一貫教育の取組について」 （１）全体報告 （事務局）説明 （２）中学校ブロックの取組報告 ・ 西小倉中学校ブロックより報告 ・ 榑島中学校ブロックより報告 ・ 広野中学校ブロックより報告 ・ 黄檗中学校ブロックより報告 （委員） １つは、小学校中学校の先生たちが交流し、指導力を向上させる取組、保護者の立場から、先生のレベルアップは非常に有難い取組である。しかしながら、現場を見ると、先生のレベルの差を感じる部分もあった。特に道徳という授業は、指導力が非常に試さ	

れる、レベルの高いことを要求されると思った。先生たちで議論をするのは本当に素晴らしい取り組みだなと私自身は思った。

新型コロナウイルス感染症の影響で、予定をしていたが開催されることが出来なかった各校の取組については、施設一体型校と施設分離型校の差が出てしまっているのだなと、感じた。施設が一緒だからできるのだという話ではなくて、できることについて施設分離型校でも共有すると、さらにレベルアップできるような取組につながる。

(委員)

企業と連携した古着回収の取組について、説明を受けたい。

(ラーニングコーディネーター *以下LC)

ユニクロとGUのファーストリテイリングが主体になる活動で、アフリカ等難民の方に古着を贈るような取組である。あわせて、SDGsへの関連や、社会貢献について事前学習を行うなど、小さい活動から世界に繋げようとするプロジェクトである。全国区で実践例がある。

回収する服は、ブランド・メーカーに限らず、概ね中学生以下ぐらいの子ども服を中心に回収するという形。保護者も協力的である。

(会長)

各ブロックの報告にあるように、特別活動を小中一緒に行うことで、安心した中学校生活につながる、取組を通じて先生方が顔見知りになるなど、垣根低く9年の重みを感じることがたくさんある。一方、先生方の専門性にもかかわり、授業については、小中一貫の活動を通じて、どう変わってきているのか。

授業、教育指導にかかわるところで、小中一貫教育の経験を通じての気づきや変容や教員の方向性について、ラーニングコーディネーターの立場からあるか。

(LC)

中学卒業後の進路、進路指導について、数年間の合同授業等で情報交換してきた。何が必要であるかは漠然としてはあるものの、具体的には共有できていなかったところもある。回を重ねるごとに、互いの授業をイメージした授業改善が整理できたところが良かったのではないかな。従来の教材研究に合わせ、中学校ブロックとして指導の在り方に対して認識が深まってきたのではないかと感じる。

(LC)

研修では、小中教諭混合の小グループで協議を進め、非常に新しい発見があった。例えば、中学校1年生を担当する教師は、授業中の挙手の仕方について、小学校の指導方法を知っておくことで、これを汲んだ指導ができたことが、良かったと話した。指導の交流は大事だが、身近な部分、指導の工夫も含め知っておくことが有益に働くことを認識した。小学校の指導が基盤にあることでの中学校の指導の有用性を改めて思う。業務の多い中「授業を見学に行ってください」と言うのは難しいが、話ができる機会を設けることの効果については認識している。

(LC)

中学校の先生が身近におり、指導方法について相談したり交流したりしやすい状況にある。経験の浅い教職員も多い中、指導方法や工夫を学ぶことは多い。さらに、専科教諭の活用により空き時間が確保されれば、他教室の様子を見ること等もできる。会議や協議を経て行うこととは別に、教師間で自主的な参観などを行い授業改善につながる工夫をしている。

「令和2年度宇治市小中一貫教育推進協議会の活動について」

(1) 全体報告

(事務局) 説明

(2) 委員による中学校ブロックの取組視察

①「黄檗中ブロック視察について」

(委員)

生徒会の選挙があり、候補者の演説についてZoomを用いた取組の様子を参観した。小中一貫教育と聞くと、人間関係のリセットというのが出来づらいのではないかなという、少しネガティブな印象があったが、その考えは覆された。立派な中学生の姿を小学生が見学し、自己の成長に重ね合わせることに繋がるし、幅広い年代と協働する実際社会を早めに体験できるという良い点が見られた。たくさんのきょうだいの中で人間関係を築きながら成長していくような感じに近いものを感じた。

校舎も新しく、廊下が広い、自然光が入る構造で、明るい雰囲気の中、教師ステーションがあるなど、生徒と先生が交流できる建物自体もすごく好印象だった。人間関係を築くとか生きる力を育むみたいな部分では、小中一貫教育はとてもいいものだなという印象が変わった。

(委員)

学力向上というのは、一貫教育になって、数字というか結果みたいなのは出始めているものなのか。

(委員)

小中学生の動線、また休み時間や中学生のテスト期間中の変更なども伺い、一体型ならではの工夫をよく理解できた。

9年間を見据えた学習指導と生活指導について、概ね全ての先生方が情報を共有するということを聞き、保護者にとってもすごく心強く、ずっと見てくれていることが子どもたちにとっても心地よさとなっている。

(LC)

本ブロックにおいては、昨年から業者テストを行っている。まだ分析の途中ではあるが、次年度に繋がるよう検討していく。

②「西小倉中ブロック視察について」

(委員)

非常に細かなレジュメを作成されていた。感心する一方で、作成により、先生たちの勤務時間が非常に費やされている。例えば宇治市のデータベースで作っておくなどすることで、改善できる。仮に各先生が図面を作ったものが共有されていないなら資産としてはもったいない。

(委員)

10年前の研究会と比べ、10年前は授業の本質論に迫るような話が出来ていなかった。今回の研究会では、授業の指導の本質に迫るような意見が交わされていたと感じた。他ブロックにおいても、試行も含めての10年以上の取り組みというのが、一定大きく進歩している。

(LC)

研究のデータは共有できるように、担当がまとめ保存できるようにしている。

③「広野中ブロック視察について」

(委員)

コロナの影響もあり、保護者向け説明会の見学となった。従来の新入生の参加はなかったが、後日説明を行うなど、取組の努力をされている。

年度ごとの課題についても、改善を施し進めていくことを大切にしていることについて説明を受けた。コーディネーターの方の努力、考え出す、連携を進める活動が素晴らしい。

(会長)

たくさんの保護者が来校し、校長先生はじめ中学校側のお話をよく聞いていたと思います。それ自体が信頼の証、積み上げの結果だろうと受け取った。

(LC)

本年度、制約はあったが、生徒たちも取組の進め方などを考えた。少し糸は細くなったかもしれないが、交流が出来ていたのは良かった。

④「北宇治中ブロック視察について」

(委員)

小中一貫教育の本格導入から毎年各校を視察している。導入当初、先生間に目に見えない壁があったことは否めなかったと思うが、「すっかり溶け込んでいる」という雰囲気を感じた。

学力向上という1つのテーマを持ち、同方向を向いて取り組む様子から、間違いなく小中一貫教育の取組が新しいフェーズに入っており、近々、その成果を見させていただけれることを期待できる視察であった。

コロナの影響もある中、保護者は積極的にPTA活動などの会議をしていたように聞くが、学校間の関係はどのような現状か。

(LC)

取組はすごく参考になった。保護者アンケートの交流も大変参考になった。違うブロックの視察に行くというのも新しい発想が生まれる。

(会長)

視察では、校長の部会参加も見られた。これまで以上に申し送り以上の情報交換が図られている様子が見られ、本当に意欲を感じた。

一方で「授業の本質に迫る」のは大変で、難しいと思われる。例えば、発達段階の違いや教育内容の連続性は当然ある中で、臨み方や向き合い方など、教育機会の提供の仕方は、違っていてもよいという話が論議できるような人間関係を作られていると思う。

だからこそ、校種による取組方法の違いについても相互に対する理解の深まりを前提に協議を進めていけるのではないかと、そうしたことも話題にできるのではないかと。

小学校と中学校の外国語教育の繋がり方、小学校の算数と中学校の数学の繋がり方、あるいは社会系でも指導の本質において小中の違いはある。相互の指導状況について理解しあえる素地や環境であるからこそ、一步踏み込んで、本質というかもっと授業を変えていきたいとか、指導の違いについてなど、論議が出来るような場を意図的に設定していける時期に入っているのではないかと考える。小中学校の違いを改めて確認したうえで、連続性や体系性を考えてみてはと思う。

また、学校の宿命だと思うが、中学校になると学習内容が生徒の生活、バックグラウンドから離れていく。だから、なぜ。これを学ぶのが生徒にとって、よくわからないということが当然発生する。そういった際に、いかに学ぶ意欲を向上させるかという話になる場合もあるが、これ自体が、小学校と中学校の違いの所産だと思う。

一度に何でもかんでも出来ないと思うが、論点を部会等で設けることで、新しい共通点や学びを通して、先生方が学び、授業も変わるし、教員の振る舞いも変わると願いも含めて思う。

(事務局)

京都府から環境づくりに、マイクロソフトのアカウントが配布されており、また、1人1台端末の導入に合わせ、教職員用としてのiPadもあることから、Web会議も可能となっている。

「令和3年度にむけて」

(事務局) 説明

(会長)

2学期の各校視察については、人数、視察対象となるブロック、テーマ、重点等焦点をしばらく学校に伺うことにすると、方向性について確認する。

(委員)

視察の形態はどちらにも利点がある。調整できたらいいと思われる。

(会長)

次年度は、複数での視察をしていくため、事務局は、調整をなるべく早い目におこなうこと。これまでは日付を指定し、その付近で複数挙げていたが、週単位での提案も、委員の調整はしやすくなると考える。

(事務局)

来年度の春の段階で、それぞれの学校の年間のスケジュール表を参考に調整し、第1回目の協議の中で示す。

(会長)

2学期の行事予定は春には確定する。そこに来てもらえたらそれでもいいし、それ以外の所で先生方の協議会とか研究発表会とかがあるのであればその週も候補としてあがる。

(委員)

テーマに沿ってであると、学校にとっても示しやすい。

(会長)

学校側から見た小中一貫の進捗管理について要望等はあるか。

(LC)

複数校をつなぐ難しさがある。別ブロックとの情報交換もないと、市全体の学力向上等には繋がっていかないとも思われるので、こういう場で聞かせてもらったことを活用していきたい。

(委員)

事務局において、来年度の共通テーマがあるのか。

(事務局)

「社会に開かれた教育課程」という形で考えている。小中一貫教育に「学校が変われば地域が変わり、そして子どもたちが光り輝く」という目標があり、「地域との関係」をテーマにしている。

従来の学習活動だけでなく、地域の方との連携とか、例えば地域ボランティアや、地域の方々の力を借りながら学習を展開していくことが、来年以降さらに工夫をされて進んでいく。

その辺りのことをテーマの一つとして、指導でのつながり、子どもたち同士のつながり、学力向上でのつながりをテーマにして、特に、学習にも注目した視察を進めたい。

(委員)

「社会に開かれた教育課程」については、なかなか難しい。一般の保護者や地域の人たちにも理解しやすい言葉に変換することを望む。

(事務局)

事務局としても、この言葉で提案をすると、一般的には広まらないと考えていたところである。簡略して説明すると、学校と共に家庭や地域にも頑張ってもらい、社会に貢献できる人材を育てる教育となるが、次年度第1回協議会に向けては、テーマを明確に持つことを検討していく。

(会長)

あまり欲張らないで、少し限定的なものでいいのではないかな。ぜひ、翻訳をよろしく願います。

(委員)

状況は、過去よりもずっと進化してきたということで、今後もさらに進化していくということに繋がっていくことだとも思われる。この活動は進めていただきたいと親の立場で思う。

半面、進めて行くこと自体が何らかの仕事の負担にも繋がっているのではと思う。教

員の負担が増えるという話になると、そうはならないようにと願う部分もある。「社会に開かれた教育課程」は、学校現場の負担増加を理由に、皆さんで手伝いましょうという読み取り方もできた。親が教育に関わっていくのは当然だが、しんどくならないような教育現場になっていただきたい。

(会長)

教育の議論とは「いいことだからやっていこう」という声が大きくなりやすいが、現実社会では、もう少し広い意味でのコスト意識とか効率とか効果とか、いいことだが、やらないということもあり得る。省力化できるところはして、出来るだけ絞っていただければと、捉えた。

(委員)

1点目は、本推進協議会のあり方に関して。この10年間ですごく研究会の内容は高まったとあるが、学校の自己満足との見方もできる。

また、小中の先生間で突っ込んだ話が出来ていないのか、さらには、「学力」ではどうかという提議もあった。現場にいる者は、しっかり受け止めないといけない。

協議内容については、評価も含め「ここは課題があるのではないかと」と教員が受け止めるということが大事と思う。

もう1点は、働き方改革について。教員の業務は非常に多い。よく議論されているところであるが、小中一貫教育について言えば、「先生方、仕事が大変ですね」と、「ちょっと授業、手を抜きなさい」という話にはならない。「もう先生、授業は適当にやって構わないから」とはならない。

宇治市において小中一貫教育は柱であり、「ここを削いでいく」という話にはならない。これからも小中一貫教育を柱にして、充実させることが、宇治市の教育の本筋である。ここについては、それなりの苦労は伴う。一方、非常に無駄な部分を削いでいく努力を他ですること。これが大事なのかなと感じる。

(会長)

言わずもがな小中一貫の進捗、発展を願うというのは、全市的なことであり、各ブロックで留まるものではない。「家庭学習の手引き」など市が共通化を図るなど、共有とか共通化できるところを広げ、新型コロナウイルス感染症対策において難しいところもあるものの、充実した内容となるよう図っていきたい。いろいろな困難はあるが、希望も含めてお願いしたい。

(委員)

時々、ボランティアをしているが、先生方は本当に忙しい。消毒作業など、昨年から続いており、この先も続くことから、やっぱり神経質になっていると思う。

青少協でも、対策を講じながらで、少しだけ行事を行ったが、コロナのことでは、ずっと負担があると思うので、皆さん頑張っていたらと思う。

「その他」

- ・「西小倉地域の小中一貫校の整備状況について」

(教育総務課) 説明

(会長)

以上で、第2回協議会を終了する。

議事録につきましては、また後日内容を整理のうえご確認いただくことになる。

3 閉会

伊賀教育部長 閉会挨拶

